

ニューヨークから

ニューヨークアートエキスポから

〈下〉

上原 誠勇

滞在中、私は二日間アートエキスポの会場に足を運んだ。幸地の今後の日程や米国側とのマネジメントの交渉を終え、ほか五百近くのブースの作品を見て回った。全体にあまり売れ行きも好調ではなさそうだが、やはり米国も不況だ。ミュージアムピース(美術館収蔵に匹敵する作品)になるような、巨匠の高額作品や良質の作品が見られない。目立つのは、アメリカンポップアートの二番せじの作品や、アメリカンインディアンや西部を描いたカントリーアートだ。そしてアートグッズに近い彫刻類であった。

美術マーケットの不況

フランス、イギリス、スペイン、イタリアなど外国の画廊もミュージアムピースになる作品は展示していない。全く残念である。投機をもくろんだ高級コレクターは買ひびかせ、完全に一般のコレクターへターゲットが向けられている。現代美術の名画廊として名を欲しいままにした、地元ソーホーのギャラリーレオキヤステリやメ

ロサンゼルス、ピバリーヒルズにあるトンブソンギャラリーで個展を終えている。音楽関係の大手タリーのクインシー・ショーンズをはじめ、カルロスサンタナなど有名なスターやアーティストがつかめ

アンチフォーマリスト

内なる母体にこだわり

「エー・グレイトアーティスト」の連続で絶賛された。このトンブソンギャラリーの幸地のカタログにニューヨークタイムズで活躍している美術評論家D・クスピット氏は幸地を「ポストモダニストドリーマー」として評論をよせている。文面の英字の簡単な単語からも評価しているのが読み取れる。モダニズムからポストモダニズムへ確実に状況は変化しているようだ。

幸地はパリで活動しながら、常にアメリカンモダニズムを射程に入れていた。しかし彼はJ・ポロックを出発点としたアメリカンモダニズムのフォーマリズムには走らなかった。むしろ美術を解体す

ることを好まず、融合する方法を選んだ。そのような視点から幸地の世界を捉(とら)えるならば、アンチフォーマリストと言えるだろう。フォーマリズムが獲得できなかった地平と東洋的世界観が支配する新たな思考空間を獲得したと言ってしまう。

モダニズムの衰弱か

ポストモダニズムの状況を迎えた今日、彼の仕事は米国で注目されるようになった。平面の原点に立ち返り、より絵画の根源にこだわった。ピカソ、ミロ以降に切り開く地平はあるのだろうか、今回の評価はその地平を獲得した証明に違いない。幸地は常に自身の内なる母体にこだわらつつ、果

てしない宇宙に眼差(まな)しを向けている。彼の口からバルセロナが出て来るのも、彼が沖縄にこだわっている証拠である。

ニューヨークをたつ前はソーホーのギャラリーを足早に見て回った。元気がない。かつてのソーホーのパワーが感じられないのだ。一九六〇年代のソーホーのアーティストは、強いアメリカの経済に支えられて、世界の現代美術を塗り替えた。

アメリカンアート―現代美術の図式ができたのもそれによる。かつてのアメリカンアートのパワーは何処(どこ)へ行ったのだろうか。八〇年代以降のアメリカのアーティストは経済の不況と運動して元気がなくなっている。九年前、四年前と訪れるたび、年々元気がなくなってきたのだ。もはやニューヨークのモダニズムは衰弱してしまったのだろうか。新しいアートが生まれるのを静かに待っているのだろうか。

け大人気だったようだ。「これまでで幸地のような作品は見たことがない」とのコメントや「色がきれいでテクニロジーとプリミティブが融合した画面は今日的だ」「エレクトロニックなパワーを感じ



ブースで自分の作品を説明する幸地学

眠っているかのようなソーホーの細長く天井の高いギャラリーをガラス越しにジッと眺めている自分がいた。いつの日か幸地のパワフルな作品が、ドカドカんと展示されているのを想像していた。アートエキスポの終了した翌日、幸地はパリへ帰った。私も JFK 空港から沖縄へむかっ

(画廊沖縄代表)